

さて、今年度の「視点・論点・ところてん」では、親、学級のこれまでになかった危機的ともいえる状況について、シリーズで取り上げてきた。とにかくおかしい。何とかしなければという思いだけで続けてきた企画だった。その内容の一つ一つがフィクションではなく、私達の目の前で起きている事実であるだけにことは深刻だ。だいたい私達が教師になった頃、小学校の高学年が荒れるなんて想像もしなかった。しかし、私達は、この重い現実を前にして頭を垂れてばかりはいられない。私達が接している子どもらが21世紀の日本を担っていくだけに、我々も、もう1度「教える」ということの意味を考え直さねばならないだろう。とにかくできることから足を踏み出して行くことが大切だ。

1. 教室で

これまで取り上げてきた子どもたちに共通するのは、

- ①ものの道理がわからない。 ②楽しければそれでいい。 ③自己中心的。 ④しんどいことはいやがる。
⑤がまんができない。(なげやり、イライラ、きれる、) ⑥あきっぱく、おちつかない。
ということだろう。

その原因を分析することは、事件の対処にあたっては必要不可欠ではあるが、極めて個別的であるし、家庭環境、成育歴、ひいては社会環境までも視野にいれざるをえず、一般論としてその個別的対応を論じるのは不可能である。したがって、ここでは「事件が起きてからどうするか」ではなく、「事件を未然に防ぐにはどうすればよいか」という視点で考えていくことにする。

(1) 学級づくりのトーンは「あかるく、やさしく、そして、きびしく」

先生や友達が自分のことをきちんとうけとめてくれているという信頼や安心感は、あらゆる活動の前提だろう。「今日も楽しかった」「早く学校に行きたい」あなたの学級はそうなっているだろうか。今一度振り返ってみよう。

(2) 豊かな学級文化の創造を

子どもたちを取り巻く退廃的文化の影響力は我々が思っている以上に強く、子どもたちをとりこにして離さない。我々がいくらその問題点を説いても、子どもたちを納得させるだけの説得力はない。「禁止だ！」と強権を発動しても、陰の文化としていき続けるに違いない。文化に対抗できるのはやはり文化しかない。私達はよく、「このクラスは、まとまりがない。」などというが、それは、「まとまりがない」のではなくて、「まとまれるもの」が準備されていないのではないだろうか。

その核となるのが、学級の文化活動だと考えている。そこで、学級文化活動を学級作りの柱にしているA学級を尋ねてみた。

A学級の仕事は、係活動、当番活動、委員会活動の3つに分担されている。

(係活動)

学級生活を楽しいものにしていくための創造的活動。現在は班単位。立候補制。自分たちがその係になったらどんなことをするのかを発表し、選挙で決定。

現在の係と主な仕事(6係中3つを紹介)

◎学習。小テスト作りと実施。宿題の答え合わせと間違いチェック。きれいなノートコンクールの計画と実施。なかよし勉強会。

◎レクリエーション。休憩時間にみんなでできるゲームの計画と実施。

◎スペシャル(イベント係)班のまとまりが要求される「〇〇大会」の計画と実施。現在、カップメンフリスビー大会を計画中。

これらの自主的な活動を通して、子どもたちはぶつかりあい、確かめあって、お互いを認めあっていくのではか、かとAさんという。私達も頑張らねば。

(3) 基礎的学力の保障

問題を抱える子どもたちの多くが、小学校の学習内容をきちんと理解していないという現実の解決は、すでに私達の能力を超えたところに存在している。しかし、子どもたちの心の叫びは私達の小さな努力を求めている。

2. 保護者とともに

シリーズの中でもとりあげたように、親たちも変わってきた。何とか立ち直って欲しいという思いで、子どもの問題点を指摘しても悪口を言われているようにしか受け取らない。親には閉口してしまう。しかし、そんな親もまた、羅針盤を失った船のように行き先が定まらずうろたえているのだとしたら、私達はやはり、手をつなぎ合う努力をし続けなければならないだろう。

学校と家庭で協力して子どもを育てようとする時、私達が学級経営の方針を誇るように親にも必ず「どんな子どもに育てようとしているのか」「どんな人間になって欲しいと思っているのか」ということを語らせなければならないだろう。それを確認しあった上での話し合いは、時間がかかっても必ず実り多いものになるはずである。

3. そして職場で

どの職場にも、解決しなければならない多くの問題がある。働きやすい職場は、子どもたちにとってもよい学校となっているはずである。疑問に思っていることを声にして、変えられるところから変えていくことが大切だ。とにかくできることから、頑張っていこうじゃないか。